

第9回藤原正彦エッセイコンクール入賞作品 講評
(審査員 藤原正彦姫路文学館長)

【中学生部門】

最優秀賞「自然に寄り添う幸せ」(山本佳歩さん)

季節や自然に対する日本人の優れた美的感受性に着目している点に、素晴らしい感覚が見て取れる。文章も非常に巧みである。「自分がその風景に立ち会った時、知っている言葉と一致することに気付いたら、一気に感動が広がる」など、ずいぶん細かい感受性を発揮している。

特に感じ入ったのは、美しい色や花などの自然現象に出会った時の発見や嬉しさを家族で語り合い共有しているところである。「私はこれからもきれいな日本語を知り、日々の季節の移ろいを細やかに感じ取りながら、昔の人々のように自然に寄り添って生活していきたい」という終わり方も大変良い。

優秀賞「後悔しない生き方を」(木村歩睦さん)

すい臓がんで余命いくばくもない祖父への優しさが充満している。甘え上手の弟と違い、祖父への接し方がわからず忸怩たる思いでいるなか、祖父がそんな自分の真意を汲み取って母に伝えてくれていたことを知り非常に感激したことが、この作品の全編を通じて流れている。「ありがとうおじいちゃん」の殺し文句で効果的に締めくくっているあたり、中学1年生にして大したものだ。

佳作「私の意識改革」(中島彩乃さん)

授業中の自身の発言が、いつも周りのクラスメイトたちの声でかき消されてしまう。人前に出ていくのが恥ずかしい、目立ったら、間違ったら…自信が持てない自分への情けなさや悔しさといった気持ちを素直に吐露している。中学生らしい繊細な感性がよく表れた、いいエッセイだと思った。

【高校生部門】

この賞が始まって以来の非常に高いレベルで、順位をつけるのに苦労した。

最優秀賞「言語偏愛者による新聞論」(百瀬泉里さん)

あまり論理的な角ばった題名をつけると読者の腰がひけてしまうことは考慮したい。

「紙の少しざらりとした手触りや、ふとした瞬間に香り立つ紙やインクのおい」—まるで評論家のように。非常に言葉がいい。高校1年生にして「熱量に溢れた文」といった表現も体得している。小さい頃は父が読んでいた新聞を「黒っぽい大きな何か」としか思っていなかった、というくだりに、わたし自身も子ども時代に同じように感じていたことを思い出した。

作者は新聞の「静謐な言葉の海」に“癒し”を見出しているが、もう一点、入念な校閲を経ての信ぴょう性に対する“安心感”も挙げられるだろう。

優秀賞「五時のブランコ」(林 凜音さん)

ブランコを通じての子どもたちとの交渉を描くあたりが非常にうまい。ブランコと数式と幼児たちが織りなす一編の詩のような作品で、大変感心した。

ブランコの下の地面に数式を書く場面は印象的である。この作者は詩人にも数学者にもなれそうだ。

佳作「ただ、ストイックなだけ」(吉住恒思さん)

自分の気持ちが正直に書けている。母の愛情を次第に理解できてゆく様子がよく伝わってくる。「母が帰ってきたら、また料理を教えてもらってもいいかもしれない—僕はそっと思いなおした」という終わり方も良い。エッセイは書き出しよりも終わり方が命。これこそ、という自分の主張を明確に示した終わり方をまず念頭におき、そこに向かって書いてゆくことが重要である。

【一般部門】

最優秀賞「インド夜想曲」(藤村貴子さん)

インドの混沌とした空気がよく表れている。駅のホームで出会った物乞いの少年に対する作者の優しいまなざしを不思議に思いつつ読み進むと、最後から三分の一くらいのところでようやく「前年、次男を事故で亡くした」と切り出される。切羽詰まった心境でインドにやってきたこと、亡き次男への思い。あの少年への向き合い方の伏線はそこにあったことを、ここで読者は知るのである。もちろん特殊な体験ではあるが、この効果的などんでん返しに非常に感動した。

優秀賞「家族のコーヒーリレー」(藤田邦子さん)

母の入院を経験した家族が、コーヒーによってつながれてゆく。時を経た今、それは作者の大学生の娘へと受け継がれているという。母の快気祝いに思い思いの飲み物で乾杯する場面も良い。特に際立った表現はないものの、穏やかで優しく温かい多幸福感に包まれる作品である。

佳作「霊供膳と麦酒」(稲葉真季さん)

構成が非常にうまい。霊供膳の支度をする「現在」から、母の記憶をたどる「過去」へ、そして再び今年も霊供膳を無事に済ませた「現在」に戻って終わる。おのずと「もののあはれ」を感じさせる。